慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	D・E・パトラー著『政治行動の研究』
Sub Title	D．E．Butler; The study of political behaviour
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.9 (1959. 9) ,p.92- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590915-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Ⅳ　以上で本書の紹介を終える。興味あるケースの中に、諸々方々に散在する著者の見識に肉づけを與えて、澤山のテーマを完成させることが後學の使命である。

この書評のスタイルは、從來のそれよりもいささか違つている。私はこれに Meditation という名を付してよいと思つている。やがて現われるべき論文の萌芽の幾つかを、この Meditation 中に見出して戴けるようになることが私の願いである。

本書については Monatschrift für Kriminologie und Strafrechtsreform (1958) Heft 3~4, S. 190 で Stutte が簡單な書評をしている。（一九五九・三・二五・ロンドンにて讀了、一九五九・七・二一稿了）

（宮澤浩一）

D. E. Butler;
The Study of Political Behaviour
London, Hutchinson & Co. 1958, 128pp.

D・E・バトラー著

『政治行動の研究』

行動科學（behavioural science）は、現代の社會科學において、もつとも著しい傾向のひとつを代表している。とくにアメリカでは、それも若い世代にあつては、まさに behavioural vogue であるとまでいわれる。行動科學とは、《科學》、《リアリティ》への指向性をあらわしているもので、その研究の焦點は、《觀察可能なもの》、すなわち人間行動一般におかれている。また、行動科學の研究方面は、社會諸科學（政治學、社會學、人類學、社會心理學、經濟學等）をはじめとして、他の專門科學（數學、臨床醫學、生理學、動物學等）とともに、統合的研究をおこない、ある側面において、科學の統一（unity of science）をはかろうとしているのである。かかる傾向は、今日のアメリカ政治學に對しても重大なインパクトをあたえ、そこでは、政治行動（political behavior）の研究が一種のムードをなしているといえる（Dwight Waldo, Political Science in the United States of America: A Trend Report, Unesco, 1956）。

このように、行動科學の研究は、政治現象をその一部分として含む、人間の行動樣式全體の領域にわたつている。そして、このアプローチを政治理論のうちにとり入れ、政治研究へ適應したものが、《政治行動》によつて通常意味されているものである。今までのところ、政治行動論者といわれる研究者は、他の社會科學者と比較して餘り多くはなく、その研究主題も漠然たるものにとどまつている

にすぎない。そこで、ワルドーが、ノース・カロライナ大學で最近作成された'Political Behavior'というタイトルのメモランダムから、右の書中に引用している箇所（二二―二三頁）は、きわめて示唆にとむものと思われるので、いささか長いけれども、その全文を譯出しておきたい。

「焦點領域としての政治行動の研究は、その主題のもつ獨自な部門というものによつて、ガヴァメント、あるいは政治研究のほかの側面と切り離されているわけではない。言葉をかえていうと、政治行動とは、例えば、憲法、行政學、比較政治機構にあたるような、政治學における新しい《フィールド》ではない。政治行動とはむしろ、政治學の通常の主題の多くのものを研究するにあたつての、ひとつの《アプローチ》、《方法》として、より精確に特徴づけられるものである。この《アプローチ》は、ガヴァメントの形式的制度もさることながら、リーダーズとフォーロワーズ、政府幹部と私的市民、有力な實業家、ロビスト連中、政黨の《實力者》、および一般の投票者などのインフォーマルな關連をも研究する。要するに、政治行動の研究者は、權力と影響力とを人間と人間との關係にあらわす、それ故に、政治過程の中核にある行動樣式の全範域に、關心をいだいているのである……。

ここに、政治行動研究の基礎的目標――政治過程における人間、および人間集團の實際の行動のうちに定律（ユニフォーミティーズ）をみつけだすこと、これらの行動樣式の性質と範圍を決定することが、研究にとつての制限的ファクターである。政治行動に關する一般化を發展せしめ、やがては、理論を定式化していくための研究方向には、次の二つのことが是非とも必要である。すなわち、經驗的方法に依據しなければならないこと、その研究が嚴密に體系的でなければならないこと、がそれである。經驗主義に力點をおくことは、政治學の多くの研究にみられる規範的性格からの離別を意味する。かくして、政治行動的《アプローチ》は、ひとが實際に何をするか（したか）にかかわつているので、何をなすべきか（なすべきであつたか）ということではない。その焦點は、法律とか憲法、形式的な統治組織そのものにあるのではなく、人間行動の研究にある。資料はつねに、觀察可能な行動の單位に還元されなければならない。しかしながら、このように《觀察可能な行動》を强調することは、歷史的研究を關連なきものとして、拒否してしまうことではない。……たしかに、ある種の重要な資料は、ある程度の……時間が經過してのちはじめて、利用できるものとなる。またある種のものは、社會的習慣、傳統、あるいは歷史的分析を要求する重要な過去の事象との文脈においてのみ、理解され解釋されうるのである……。

體系的研究が必要であるということはただ、政治行動における定律の探究が、檢證さるべき假說と、そうしてつくられた假定とからなる明瞭な陳述に基づいていなければならないこと、さらに、命題を檢證していくには、絶えずつづけられる研究の努力によつて妥當とされるような方法において、經驗的證據を愼重に秩序づけることによらなくてはならないということ、を意味している。かかる研究には、數量的テクニックがあきらかに重要な地位を占めるが、さりとて政治行動の研究者は、どんなひと揃いの方法にも自己を限定されるわけではない。研究者は、資料を量的にも質的にも取扱い、政治現象の分析に關連を有すると思われるいかなる概念をも、それらを手がかりとし、適用するよう心がける必要がある。」

ワルドーは、アメリカにおける政治行動の研究の主要な焦點領域として、權力、集團、決定過程、政治的關與、そのほか、エリート、シンボル、コミュニケーション等を擧げているが、これらは領域自體が新しくもユニークでもないのであつて、それらに對する行動的アプローチとそれによつてもたらされた結果とがそうなのである。この點で、イギリスの政治學者D・バトラーの近著『政治行動の研究』は、行動的アプローチの諸類型を明確にし、それらが適應されている研究領域の問題とも關連させて、政治行動に對する理解の手引きをあたえてくれている。バトラーは、本書のタイトルについて、イギリスにおける慣用法としては、*The Study of Political Behaviour* と *The Study of Politics* とに明確な區別はないが、ことさらに前者を附したわけは、それが人間行動の經驗的研究を示し、社會學や心理學などのテクニックや結論に基づき、政治の實際的な調査研究をおこなう「特殊な種類のアプローチ」をよく示していると考えられるからだ、と述べている。

演繹的アプローチ（Deductive Approach）

古來、政治研究は哲學的省察によつてなされてきた。多くの政治理論家の著述は、ア・プリオリ・アプローチによる理論構成に終始し、現實的問題をつきつめていこうとしなかつた（傳統的政治理論は、verbal metaphysics であつたという批判は、ウェルドンの言語分析的立場から鋭くなされている。T. D. Weldon, The Vocabulary of Politics.）。それに對して、最近の經驗主義的研究者は、政治行動に關する確證をア・ポステリオリに論究しようと試みている。しかしながら他方で、數學者の感化をこうむり、電子頭腦の發展とも相俟つて、ゲームの理論というフレッシュなアプローチが政治研究にも適應されだした。これは純粹なるア・プリオリ・アプローチとして注目されるが、著者の見解では、その假定は高度に形式化されており、錯綜した現實世界においては、きわめて特殊な

狀況に對してだけしか適應できず、今のところ、政治研究に貢献する段階にいたつていない。ともかく、演繹的アプローチには限界があり、もし經驗的な政治行動の研究者が利用するとすれば、道德的前提を扱つたり、論理操作をほどこすこと以外にはない。著者は、演繹的アプローチの限界性をいちはやく看取し、政治研究における主知主義的僞瞞というものを批判して、新しい人間性の概念との關連において、政治學の再建をうながしたG・ウォーラス（G. Wallas, Human Nature in Politics.）を、政治行動の研究のパイオニアとして、高く評價している。

記述的アプローチ（Descriptive Approach）

政治行動の研究に、歴史的・記述的アプローチは重要な貢献をなしてきた。イギリスにおけるバジョット、ブライス、オストロゴルスキー等の諸著述は、政治制度に關する明敏な事實觀察のすぐれた例證である。こうした傳統は、現在でも、Sir Ivor Jennings, Parliament and Cabinet Government; R. T. Mckenzie, British Political Parties; H. Morrison, Government and Paliament にうけ繼がれている。アメリカにおいても、記述的アプローチはさかんに用いられ、とくに、《事例研究（ケイス・スタディー）》、チーム・ワークによる調査研究には、多大の成果が收められている。また、比較研究的アプローチにも、K. C. Wheare, Federal Government; M. Duverger, Political Parties; R. Macridis, The Study of Comparative Government 等がみられる。さらには、政治研究に豐富なデータを提供してくれる自傳とか回想錄、議事錄、そして小說的手法による記述も、啓發的な要素を多くもつていることはいうまでもない。

數量的アプローチ（Quantitative Approach）

政治現象のすべての側面が量化できるわけではないけれども、ある主題、とりわけ、大衆行動（mass behaviour）の研究にとつては、數量化の方法、統計的說明が有効であることがあきらかにされている。ギャラップ世論調査以來、サンプリング・アプローチは、投票行動について、これまでに發見されなかつたインフォーメーションをあたえてくれるようになつた。政治行動の研究領域において、サンプリング調査のさまざまな技術的進步はもつとも顯著であり、新しい探究にますます刺戟をあたえつつある。數量的アプローチは、事實、資料の記述・分析に明晰さと精確度を加えはしたが、それにともなう弊害もないではない。著者の指摘するところは、第一に、數量的データを收集し、細大洩らさず計算し、あるいは、統計圖表をつくりあげる努力がそれ自體目的とされてしまい、かえつて人間の現實性を見失なつてしまう危險性があること、第二に、しばしば、數量化と科學とを同一視する傾向があり、嚴密な測定を求

めるのあまり、そうすることの不可能な要素を無視したり、無理にも數量による體裁をととのえたりしようとする危險性があること、である。數量的アプローチにとつては、當然のことではあるが、'measuring is for the measurable' ということ、數の嚴密さということよりも、a feeling for numbers もしくは a sense of proportion ということが必要である。

社會學的・心理學的アプローチ(Sociological and Psychological Approach)

アメリカにおいては、政治學と社會學、人類學、心理學とは密接に結合している。政治學に對する社會學の貢獻は、集團なり社會なりの研究を通じて、社會構造や行動の諸原理を解明した點にある。だがとくに、社會學者が個々の社會の事實分析に基づき、社會階級や人種的少數集團を研究した成果 (C. W. Mills, The Power Elite とか G. Myrdal, An American Dilemma は、特異な勞作として著名) は意義深い。また、未開社會の現地調査をおこなつている人類學者の貢献するところも大である。最近では、ある人類學者は、その概念とテクニックを文明社會にも適應するよう努力している。こうした社會の研究に對して、パーソナリティの研究は、心理學者によつて精緻な探究がすすめられてきた。パーソナリティ特性と社會行動との關連性、パーソナリティの形成過程と政治的態度決定、これらの問題は心理學的アプローチによつて明確にされた。心理學がもたらした有益な知識は、イデオロギー、プロパガンダ、コミュニケーションの問題とも深いつながりをもつている。ところで元來、社會學や心理學は、人間と社會とのより一般的問題へ接近していつたその付隨的副産物を政治學者に供給したわけであつた。しかし專門政治學者によつても、《政治社會學》への關心が高められてきたことは注目に價する。パレート、モスカ、ミヘルス等の著述はこの範疇に屬するものである。

實踐的アプローチ（Practical Approach）

政治家、政黨人、あるいは政府の各種委員會は、政治の重要なイシューの具體的解決に取組む必要上、實踐的アプローチによつて、多くの著述や報告書をあらわしている。實踐的アプローチはアカデミックな研究が目的であるのではなく、したがつてそれを明確なタイプとして把握することは困難である。しかしながら、そこにみられる政治の實際的經驗と叡知、政治的技術などは、政治行動の研究に缺くことのできぬものである。

以上がバトラーによつて示されたアプローチの概要である。このうちで、政治行動の研究にもつとも目立つたものといえば、社會學的・心理學的アプローチであろう。それは政治行動の多くの側面に價値ある洞察をあたえるものと思われる。しかしここで最後に留意

すべき點は、著者がアメリカに比べて、イギリスでは、こうした新しいアプローチがそれ程影響をあたえてはおらず、社會諸科學の統合的研究がすすんでいない、と指摘していることである。その理由は、イギリス政治學者のアカデミックな保守主義、偏頗、怠惰にもよろうが、それにもまして彼らは社會學や心理學の知識や技術にわずらわされるのを嫌い、それらの研究成果を愚にもつかぬもの、または、念のいつた科學的專門用語で衣をきせられた常識にすぎない、と簡單に片づけてしまう傾向があるからである。だが他方で、より愼重に傳統的アプローチをまもつている學者たちは、これらの新しい發見が有用であるという事實を否定しはしないけれども、それにしても彼らの主要な關心は、ガヴァメント、ナショナル・レヴェルにおける權力の行使にあるとし、それらの領域は、社會學者や心理學者の及ぶところにあらず、と主張している。著者自身は、勿論、こうした態度を遺憾に思つているが、同時にまた、アメリカにおける政治行動の諸研究に對しても、批判的態度をとつている。

このことは、きわめて重要な問題を含んでいる。アメリカにおいて、かくも熱狂的な人氣を呼んでいる政治行動の分析が、なぜ、イギリスでは冷淡な態度でむかえられているのか。バトラーの本書と關連して、A・ハッカーは Political Behaviour and Political Behavior という標題の論文を *Political Studies*, Vol. VII, February No. I, 1959 (pp. 32-40.) に寄せている。この論文は、「アメリカが水洗便所だけでなく、政治學研究においても世界をリードしている」現狀にあつて、「なぜ、とくにイギリスの政治學者たちが、行動主義的黴菌に感染されていないのか」という問題に對し、彼一流の皮肉をもつて、解明しているのである。ハッカーの批判的見解を要約しておくと、つぎのごとくである。

(1)イギリスとアメリカの政治學者の生活態度を比べてみよう。前者は讀書室の靜けさのなかで、文献を調べている。後者は大衆や工場の喧噪のなかに出かけていつて、せわしなく動きまわる。イギリスの學者は、なにはさておき、教授なのだ。アメリカでは、教授でも實際活動に從事し、彼の學究上の正當性にも世論の承認を必要とする。かくて、行動研究は至上命令である。さらにまた、大學の職業としての地位を確保する問題も、これにからんでくる。アメリカの制度では、大學で終身的資格に昇進できるようになるのは、スタッフとなつて十五年たつてからのことである。その間、學者はうわべだけでも學問的生產を示さなくてはならない。彼らにとつては、政治學の傳統的本職を地味にやつてゆくより、行動的アプローチをえらんだ方が、仕事振りをひけらかすのにもつてこいの機會である。

(2)政治學者の數を比べてみても、アメリカには、政治學專門の研

究機關を備えたところが三百餘りもある。兩國の政治學會の人數をみても、イギリスでは二百人足らずのものを、アメリカでは七千人もを收容している。アメリカの惠まれた教職のキャリアーには、大學院學生がうようよひしめいている。教授連も自分のセミナーに學生をひつぱりこもうと、競爭する。ここに、行動的アプローチをもちいる學者は、魅力の點で申分ない贈り物をさしだすわけだ。彼らは學生を助手として雇い入れる。行動主義は、まつたく、self-generating となつてゆくのである。

(3)アメリカの政治學會員の出身名簿をみてみよう。アメリカの大學教授は學位こそもつてはいるが、著名なひとたちでも多くは、地方の無名な大學から授與されている。イギリスの學者と比較すると、彼らはよほどポピュラーな性格をもつている。彼らはスラム街などに出向いて、そこの住民と親密になれる。イギリスの學者は、その出身階級からして、その氣位がどうしてもこれを許さない。彼らは自國の勞働階級のことなどあまり知らないのだ。イギリスの學者が、ダーハムの炭坑夫と、夫婦以外の性的關係を氣輕に話し合えるようにならなくては、イギリスに政治行動の科學など生まれつこない。

(4)アメリカの政治學者のあいだでは、社會學者や心理學者との交流がさかんである。おたがいに、政治行動の研究に深い興味がもたれている。政治學者は、これらの姉妹學問に刺戟をあたえられているのに反して、イギリスでは、それらの學問は、異母姉妹だとみられている。

(5)行動科學は、そのラディカルな經驗主義の役割として、社會の權力組織「誰が、何を、何時、如何にして決定するか」を綿密に觀察・記述しようとする。ところが、イギリスの學者たちは、あまりに政府機關と近接しすぎているのだ。彼らには、かつて一緒の大學に通い、個人的にも交際している人物を、詮索することがすこぶる困難である。アメリカでは事情が異なる。アメリカ人は、ありのままに、權力や意思決定の事實を研究し、出版できるのである。

(6)アメリカの行動主義については、この研究領域に對する財團援助の役割を、觸れずにすますことは不可能である。研究補助金は、傳統的研究よりはむしろ、行動的研究にあたえられている。著名な教授になると、ひとつのプロジェクトに五萬ドルほどの研究費がえられる。教授は大學院學生を使うが、彼らもその研究から、自分の博士論文を書くデータを使える、という仕組みになつている。勿論、アメリカの大學では、學生がみなこうだというのではない。彼らも、いちおう政治思想史や政治制度の研究をおこなつてはいるものの、一度、行動的アプローチにさらされると、傳統的アプローチに復歸することに嫌氣がさす。もつともこの責任は、行動理論の革

命家に歸せらるべきものではなく舊體制にこそあるのだが。

(7)アメリカで、行動主義がアピールするのは、それが學者にとつて、彼らの政治的態度をかばつてくれる便宜的な、まさに時をえた逃避であるからなのだ。彼らは、イギリスの學者と違つて、社會の評價と判斷に對して小心翼翼としている。左翼的とか非米的とかという疑惑がすぐかけられがちである。行動主義の流れにとび込んでしまうと、うるさいことをいわれずにすむ。例えば、モデル構成はまつたく假設的なものであり、數量化は沒價値的なものであるからである。專門語でしやべれば、聞き手も限られている。じつは、行動主義の存在そのものが、アメリカの學者の意識的・無意識的な保護裝置にほかならない。

ハッカーのいうところは、いささか牽强附會といつた趣もあろうが、傾聽にあたいする意見である。彼は本書について、

The reader will learn what is wrong without knowing what it is that is wrong.

といつているけれども、バトラー自身の見解には、感情的反撥は少しもない。むしろ彼は、政治行動の研究に對する冷靜な批判者であり、それに好意的ですらある。がともかく、右に述べられたハッカーの批判の最後の項とともに、バトラーが（アメリカの場合を暗示しながら）、アメリカにおける研究のある側面には、重要な具體的政治問題になにも答えず、もつぱら科學的・實證的陳述を論議し、方法論の泥沼に陷ちこむ傾向がある、と指摘している點は注目すべきことである。彼は、アメリカの社會學者R・K・マートンのつぎの言葉をもつて、警告を發する。

'Americans know what they talk about but they don't talk about very important things. Europeans hardly know what they talk about but they talk about things that matter.'

（奈良和重）